

中国における大学生の学習状況は進学動機・専門選択理由とどう関連するのか  
—日本語専攻の学生を対象に—

専攻 人間発達教育

コース 教育コミュニケーションコース

学籍番号 M14010G

氏名 曾听 ソウキン

「研究目的」

中国の高等教育は、短期間内に大衆化した。高等教育の規模は世界一になっている。しかし、高等教育大衆化に対する深く正確な理解が不足していたため、高等教育では単に量と規模を追い求めて、「質」が軽視されているという問題が出現した。現在の大学の中に、学習目的、学習態度と学習自律性などの方面が問題になる大学生が少なからず存在していると言われている。本研究では、学習時間の量的側面と、学習態度の質的側面を含めて、両方を見ながら、現在中国における大学生の学習状況について、大学生の学習の質は実際下がっているかどうか、どう下がっているか、本当に勉強しているのかを明らかにすることを目的とする。また、大学へ進学動機と日本語を勉強する理由は学習状況（学習態度と学習時間）とそれぞれにどのように関連があるかを明らかにすること。

「研究方法」

- ① 調査時間：2016年10月20日（木）-21日（金）に実施した。
- ② 協力者：調査協力者計151名で、有効な質問紙は149であり、有効率は98.67%であった。そのうち男性26名（約17.44%）、女性123名（約82.55%）。
- ③ 使用尺度：学習時間—溝上（2009）が山田（2007）の大学生アセスメント調査JCSSの項目を参考にして作成したものである。授業、授業外学習、自主学習、読書など17項

目からなる。それぞれに対して「21時間以上（8）」・・・「全然ない（1）」の8件法で回答を求めた。

学習態度—大学生の主体的な授業態度を測定するために畑野（2011）によるACA尺度を採用した。9項目5件法で尋ねた。

日本語選択理由—趙（2012）、竹口（2015）、小林（2008）を参考にしながら合計65項目から成る尺度項目を作成した。5件法で尋ねた。

大学への進学動機—永作・新井（2003）による自律的高校進学動機尺度を大久保ら（2010）が大学生用に修正したものを採用した。19項目、5件法で尋ねた。

「結果」

学習状況の検討—授業内学習時間については、ある程度の学習時間があることに示された。授業外学習時間について、毎日の学習時間は1時間未満の人が総人数の7割に占めていた。先行研究と比べると、対象校の大学生の学習時間はかなり少なかった。そして、授業内学習時間と学習態度は関連があり、授業外学習時間と学習態度は関連がなかった。また、授業内学習時間と授業外学習時間は負の関係にあり、学生の勉強時間は、授業内か授業外かのいずれかに分かれることが示された。

進学動機と学習状況の関連—進学動機づけは「恥意識」「特定大学への関心」「大学全般への関心」3因子から検討された。「恥意識」は学習態度と関連があり、学習時間と関連がなかった。「特定大学への

関心」は学習時間と関連があり、学習態度と授業内学習時間と関連がなかった。「大学全般への関心」は「授業とは関係のない勉強」と関連があり、学習態度とほかの学習時間と関連がなかった。

日本語選択理由と学習状況の関連—まず、10 因子「異文化への知的好奇心」「知的虚栄心」「追随」「道具的」「伝統歴史への興味」「生活への興味関心」「楽勝認識」「従順」「交流」「文学・小説への興味」に分け、それから二次因子分析を行い、4 因子「知的欲求」「他人への関心」「交流」「生活手段」に分けた。学習状況との関連を検討したところ、学習時間については、「授業内学習時間」は「知的欲求」「他人への関心」と正の関連があった。「授業外学習時間」は「知的欲求」「他人への関心」と負の関連があった。学習態度については、ほとんど関連となかった。また、二次因子分析の因子得点を用いた、クラスター分析を行ったところ、日本語選択理由のタイプは「全般興味型」「知的探求型」「現実型」「非交流型」4 つに分けられた。「全般興味型」と「知的探求型」の学生は「授業内学習時間」の得点が一番高かったが、「授業と関係のない勉強」の得点が一番低かった。「現実型」と「非交流型」の学生はその逆だった。また、各タイプと「学習態度」の間に関連がなかった。

#### 「考察」

中国における大学生は、高等教育が大衆化されて以来、勉強していないという実態が本研究では見えてきた。高等教育の大衆化が進んだ現在の大学生は、進学への明確な目標もないままにただ流

されて大学に入ってしまったという実情を示していると考えられた。

また、授業に関連する勉強と授業に関連しない勉強とがかなり明確に分断されているようであった。ここには、受験勉強思想が反映されている可能性がある。受験勉強は学生の学習意欲を喚起できるが、外的な働きかけによってやらされる勉強としての側面が強いため、自主的な学習態度を奪う可能性がある。授業に関連する決められた学習と、授業に関連しない自分で行う学習とを連関させて、全体的な学習状況を改善するには、中国の大学生の学習に対する自律性を高めることが必要であるのではないだろうかと考えられる。

また、本研究では進学動機や専攻選択理由など、入学前の意識と入学後の学習状況との関連を検討したのだが、大学と高校の環境差が大きい場合、入学前の意識が入学後に保たれるとは考えにくい。学生自身の学習態度も激しく変化するだろう。元高校で真面目な子も、大学へ進学したら、緊張感がなくなり、自由な大学で自分を見失う可能性もある。その中で、授業外でも勉強する時間をもつには、大学への関心が必要になるのだろう。ただし、大学への関心が「大学の楽しさ」である場合、その関心の内容は学習に対することではなく、大学での遊びや部活動などである可能性も高い、その場合には、興味と学習状況とは結びつかないと考えられる。大学への関心や興味の内容、また、入学後の意識の変化なども考慮した上で、大学生の学習状況の要因を検討する必要があると考えられた。

主任指導教員 中間玲子

指導教員 中間玲子